

## 日本語と中国語：最近考えたこと

著者	西岡 晴彦
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 3: 1-7(1984)
発行年月日	1984-07-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10091/00022362">http://hdl.handle.net/10091/00022362</a>

# 日本語と中国語

— 最近考えたこと —

西岡晴彦

私は昨年の十月から久しぶりで、中国語の初歩を学生に教えることになった。外国語を教えることのむずかしさをあらためて感じているところだが、教えながらいろいろ考えたことを思いつくままに記してみることにした。

## 一、「さようなら」と「再見」の間

語学の初歩では、まず日常会話、そして挨拶語が出てくる。ここではまず、三つの言葉をとりあげてみよう。

別れの挨拶語でもっとも一般的なのは、再見 (zai jian) で、日本語では「さようなら」と訳す、再見は読んで字のごとく、「もう一度会おう」という意味である。この「再」のかわりに「明

天」(ming tian) や「后天」(hou tian) を代入すると、それぞれ「明日会おう」「あさって おう」という意味になり「見」のかわりに「会」を代入し、「再会」(zai hui) とも言える。だから別れの挨拶語としての「再見」は堅い熟合関係をもつ言葉でなく、再、も見も、他の語と結びついてゆく可能性をもつ言葉である。さて、その訳語の「さようなら」は「元来接続詞で、それならば、の意、別れの挨拶語。左様なら」(広辞苑)と説明されている。

感謝の意を表わすもっとも一般的な言葉は謝謝 (xie xie) で、訳語は「ありがとう」である。「謝」は藤堂明保氏によれば「張りつめた弓を手から離す。矢を射て、弓の緊張が解けてゆるむ様を示

す射という語の原義に 「言」がつき、「言葉をあらわすこと」によって負担や緊張をとき、気楽になること」(中国語源辞典)である。謝は二回重ねて用いられ謝謝となり又、「多謝」とも言いかえられる。一方、「ありがとう」の方は「アリガタクの音便、下に「ございます」「存じます」の略された形、感謝、謝礼の意味」(広辞苑)である。

失敗などして他人にあやまる時に、中国語では对不起 (duìqǐ) という。日本語では「すみません」が訳語とされる。「対」とは藤堂氏によれば、「左右対称になり、まともに向きあうこと」であり、「不起」とは、動詞のあとについて、その動詞の表わす状態が持続できないことを示す。(中日大辞典)と説明されている。したがって、「对不起」は、相手の顔がまともに見てもらえない。という原義をもつ言葉である。一方「すみません」は、「物事が決着せず、また自分の気持が落ちつかないという意から、相手に對してあやまる時、礼を言う時、頼む時などにつかう。(広辞苑)と説明される。

さて、この三つの挨拶語を例として、中日両国の言葉の性格や成り立ちを考えてみることにしよう。

まず文法的に考えて見ると、中国語の三つはいずれも動詞又は動詞を主体とする連語で各々の語の前に第一人称、あとに第二人称を補って、S+V+Oという形の完結した文を形成することができる。我再見称、我謝謝称、我对不起称、はそれぞれ文として完結している。

日本語では、「さようなら」は接続詞。「ありがとう」は形容詞の一部、「すみません」は動詞文(?)であり、それぞれに第一人称第二人称を加えて、文として成立できるのは「私は君にすみません」だけである。

次に言葉の原義の示す意味内容について考えてみよう。

再見||また会おう。は(ここでは一おう別かれるが……)の意から転じている。

謝謝||私はゆったりできた。(君のおかげだ)

对不起||顔むけできぬ。(君への心理的負担で)それぞれが具体的な行動の陳述であり別離、謝礼、詫びの際におこる心理的な状況描写である。ところがこれと対応させた日本語の場合は、次のようになる。

さようなら||そうであるならば、だけでは殆んど意味をなさない。「さようなら」の発話者は相手との間に、別離せねばならない状況を認め「そうであるならば」と言い、「別れるのもやむを得ない」という含意を示す。この場合の「そう」という状態をつくり出すのは私でも君でもいいし、その両者でもいい。主客の関係は必ずしも明確ではない。

ありがとう||有り難う、は話し手が受け手の行為を「一般には有り難いこと、稀有なこと」と認定し、その状況を描写したもので、「そのような行為をした君に感謝する」という含意がある。中国語の謝謝が、自分の心理的な解放感を述べているのちがって、人間

とは一応独立した「行為」の有り難さを述べるところに特色がある。すみません、済みません。は「私は君に対して、気が」という語を上に補うと意味的にわかりやすくなる。中国語の对不起と心情的には近い表現である。ただし、「すみません」の方は、詫び以外に感謝や依頼、よびかけなど多義的な内容をもつ。对不起にはその反対の意味の対得起 (duìqǐ) (申しわけが立つ) という言い方があり、相手にあやまるという意義しかないのと対照的である。

以上三つの挨拶語を比較して、中国語とくらべて日本語の特色を挙げると、(1)主客の関係が曖昧である。(2)省略部分が多く、含意性に富み、多義的。(3)動詞的でなく形容詞的(「する」でなく、「である」)で状態を描写する場合が多い。等が考えられる。

## 二、「侵略」と「進出」の間

一昨年(一九八二年)の夏、日本のマスコミは、小中高校の歴史教科書の検定問題で大揺れであった。その中心的な事件は、第二次大戦中の日本軍のアジア侵略を、文部省が「進出」と書き改めるよう指示したことであった。私はこの事件についての日中両国のかかわり方に興味をひかれた。事件は大すじで次の様に推移した。

- (1) 侵略→進出の書きかえ指示(文部省)の新聞記事
- (2) アジア諸国、ことに中国、韓国の反撥。
- (3) 日本国内でのこの件に関する論議。
- (4) 文部省の高官の中国・韓国への派遣、説得、説明。いずれも不

調におわる。

- (5) 日本側の主張全面撤回。
- (6) 教科書記述の再改訂。進出→侵略

日本側はこの件に関する限り、全面的に敗北し、相手国の主張をうけ入れた。私はこの事件を「言葉」の側面から考えてみることにしたい。

まずこの 侵略→進出 を中国側ではどううけたか、を当時の中国の新聞記事から抜き出してみよう。

### 日本語の「進出」とは？

問……日本の文部省は、新たに検定した教科書の中で、日本の中国「侵略」に関する歴史記述の多くの部分で「進出」と書き改めている。

例えば、日本軍の華北侵略は、華北進出にかわっている。……ニュースには日本語の「進出」という語がそのまま用いられているので、多くの読者はこの言葉の意味がはっきりせず、ある読者は「進進出出」(入ったり出たり)の意味にとっているのだが、これでよいのだろうか？

答……日本の岩波書店版の「広辞苑」では「進出」の日本語の意味は、「自分から出かける。ある場所からさらに前進する」である。又、日本の研究社出版の「新和英大辞典」の英語の解釈では、その意味は advance march であり、これによって日本語の「進出」が「自ら前へ進む」という基本義をもつことがわかった。(82・

右の記事では、日本語の「進出」という言葉がそのまま中国語に読みかえられると、まったく別の意味（入ったり出たりする）の言葉になってしまうことを示している。更にこの記事は、次のようなコメントを付記する。「進出」という言葉は日本語では否定的ニュアンスはなく、いささか肯定的なニュアンスがある。」と。

この部分は重要なポイントで、さきにも述べた(3)の日本でのこの件の論議でも問題になったところがある。「進出」肯定論者は、「侵略」とは他国に侵入し、その地の領土を政治的に支配、領有することを言う。したがって、第二次大戦時の日本の行動は、進出であって侵略ではない。というのがその主な主張であった。「侵略」というあからさまな否定的表現を嫌い、「進出」という中立的表現を好むという日本人の意識の一面を代表するものであった。国交回復後すでに十年を経、日中間の友好関係はより深まってきているのだから、昔のことはとやかく言わない方が、という気分が中国人の人々の中にもたしかにここ数年来ひろがってきていた。この気運を敏感に察知し、「中国恐るるにたらず」という立場から作り出されたのが「侵略→進出」論であったと私は考えている。この件に関する中国の論評をもう一つとりあげてみよう。

「日本による侵略によって極めてひどい苦難を被った中国人民として、目前の日中国交樹立十周年に際し、我々は日本の文部省と文部省を支持する高官や官僚たちに感謝せざるを得ない。なぜなら彼

等は自身の言論と行動をもって、両国関係の発展過程において、もう一つの側面が、すなわち軍国主義復活をたくらむ逆流がまだ存在していたことを中国人民に知らせてくれたからである。言うまでもなく、中日両国と両国人民は友好を願ひ、現在の我々のみならず、子子孫孫にわたって友好を願ひ続けるものである。しかしながら、この目標を実現するためには、両国人民はともに努力を傾け、軍国主義復活をたくらむすべての逆行に対して、いささかの曖昧さもない痛撃を加えねばならない。」（82・8・3 人民日報 評論員論文）

残念ながら、私にはこの論評に反駁する資料をもちあわせない。事件の本質はまさにここに述べられている通りであり、日本側の「進出」擁護論者も沈黙せざるを得ないだろう。中国側の論調はこのほか酷しいにも拘わらず、読後感は意外にさっぱりして、後味もわるくない。それは、この文章が彼我の立場を明確にし、問題解決の方向を明示していて、一步も妥協せず、一点の曖昧さもしていないからである。

日本側のこの件へ対応を見ると、当初は余裕ありげな態度だったが、中国・韓国の問題への真剣な憤りに会うと、特使を派遣して弁解につとめようとした。その弁解の内容は、「日本国内の教科書検定制度のしくみ」であり、このしくみさえ相手国に理解されれば問題は解決するはず。という言明がしばしば出されてきた。一方、国内の教科書執筆者の「進出を侵略に書き改めよ。」

という要求は、受け入れられなかった。だが、最終的には、中国・韓国ともに、国交に大きく影響するほど、この問題への批難が起ると、遂に日本側の全面的譲歩で結着のはこびとなったのである。

私はこの経緯で、日本語、乃至は日本語的思考が国際的な外交関係の処理にとって、いちじるしく不都合であるということを感じざるを得なかった。中国側が指摘する、「軍国主義復活の逆流」を無意識的に支えているのがこの日本語的思考法ではないか？

挨拶語のところで述べたように、日本語では、つねに自他の対立を解消させるように用いられ、また言葉の本来の意味からズレた形で慣用化され、含蓄や隠影にかくれて事がらを明示的に表現することをむしろ避ける傾向がある。その顕著な例としては、戦時中の退却→転進、全滅→玉砕から敗戦→終戦、占領軍→進駐軍があげられよう。これらの場合、すべて事態の本質的な要素が引き去られ、その言葉の本来持っていたマイナスのイメージを逆にプラスの方向に転化させたり、マイナスの要素を希釈化させている。これらの例がすべて、直接的に政治・軍事にかかわり為政者側によって作りあげられた言葉であることから推して、侵略→進出もこのような中立化希釈化の流れの中でつくり出された日本語的思考法の産物であると言える。勿論私は中国側のいう「逆流」の担い手の意図的な策動の存在を否定するつもりはない。そして彼等とそれを支えるマスコミが、戦中から今日まで一貫して人民統治の手段として造り上げ定着せしめてきた時事用語を、何のためらいもなく容認し、市民権を与えてきた

私を言ひ日本人の言語感覚も同時に問わねばならないと考ふるを得ないのだ。今度の場合、それらの時事用語が国内むけであった時には、殆んど問題になり得なかったのだが、それが他国とかかわってきた時に、その特異な歪みを露呈させられたわけだ。当時文部省が、中国や韓国にむけて、日本国内の検定制度のシステムを説明することによって問題を解決できるとまじめに考えたことも又、日本語的思考法であらわれである。自他の区別をことさらに捨象して、対象と同一化することを目的とする思考法からすれば、相手国も当然こちらの「制度」に理解を示し、文部省の「立場」に同情するはずだという思い入れがおこってくるのは自然である。しかしこういった思考法が中国のみならず韓国にもまったく通用しなかったのも又理の当然であった。私はこの件の結末がきわめてあけなくついでに、その後何の論議もおこっていないことに、ある程度の危惧の念を抱いている。なぜならばどうもこの結着にはいわゆる「政治的配慮」が働いていて、相手国の要求を充分に理解した上で、反省をこめて解決したとは思えないふしがあるからである。例えば、当時同じ立場にあった東南アジアの諸国との関係の記述や、沖繩戦の記述については不問に付されたままだということ。そして、この種の「言葉」をめぐる失敗を、われわれの国は十数年以前にも経験済みだったということ。思い出さずにはいられないからである。

### 三、めいわく、と 麻煩の間

今から十二年前のことになる。その時、日本の首相田中角栄は中国総理周恩来主催の歓迎レセプションで演説を行った。その中の一部をとり上げる。

「……しかしながら、過去数十年にわたって日中関係は遺憾ながら、不幸な経過を辿って参りました。この間、わが国が中国国民に多大のご迷惑をおかけしたことについて、私はあらためて深い反省の念を表明するものであります。第二次大戦後においてもなお不正常かつ不自然な状態が続いたことは、歴史的事実として、これを率直に認めざるを得ません。」

この文章は、田中氏が、日本と中国が地理的に近い「一衣帯水」の国であり、二千年もの交流の歴史をもつと述べたあとをうけている。又この文章のあとは将来の日中関係についての希望と意見がつづく。したがってこの部分が、日本国代表としての田中氏の戦争状態にあった日中両国の関係に対するコメントの総括を考えてよい。ところでこの文章は、同時に発表された「日中共同声命」の次の表現をうけて述べられていることは明らかである。

「日本側は、過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する。」

「演説」を「声命」と読み較べると、そこに明らかかな日本語的、乃至は日本文化的潤色のあとが見られる。まず目につくのは、主体

がきわめて不明確なことである。例えば、「不幸な経過を辿った」のは「日中関係」なのであり、「不幸」の原因は全く不問に付されている。声命において「重大な損害」と客観的に明示されていたものが「多大のご迷惑」という心情的側面へとズレる。そして「責任」と「反省」のうち「反省」のみが、私つまり田中個人の心理的営為として残り、社会的、対他的要因をより強く含む「責任」は抜けおちている。そして、「第二次大戦後：以下の文章も、さきの「日中関係」を主語としてつづき、それを「不正常・不自然」ならしめた主体を欠落させ、「歴史的事実」という外在的な事からのみを（私が）率直に認めようとするわけだ。ここには戦後の日中関係、ことに台湾の将政権のみを唯一合法の政権と認め、これを支援するアメリカの対中国政策に便乗して、一貫して中国敵視政策をとりつづけてきた日本政府の主体的態度は抹消され、あたかも自然現象の如き「歴史的事実」が出現するのである。つまり、戦後三十数年にわたる日中関係について「責任」のともなう「反省」はここでは述べられていないのである。ところでこの部分の中国語訳は「我們不得不承担地承認这个历史事实」（われわれはこの歴史的事実を率直に認めざるを得ません）となっている。「歴史的事実として」という言いまわしは、中国語にはならなかったのだ。この「として」は特定の場合を限定する言葉である。わざわざこういう言いまわしをする田中氏の意図は、決して「率直」なものではない。ところでこの部分に対応する周恩来氏の答辞をひこう。

「：しかし一八九四年以来の半世紀のうち日本軍国主義の中国戦略によって、中国人民は重大な災難を蒙り、日本人民も大きな損害を受けました。前事を忘れず、後の戒めにせよと言いますが、われわれはこの経験と教訓をしっかりと胸に刻んで記憶しておかねばなりません。」

日本に対する賠償請求権を放棄した国の総理大臣の言葉である。

両国の首相の言葉にあらわれた事実認識の差をくっきりとさせたのが、田中発言のなかの「多大のご迷惑」という表現であった。この言葉は、「麻煩」(Matahan)と訳され、中国側から抗議された。

麻煩は(1)めんどくさい、煩わしい、(2)手数をかける、お世話になる。例 麻煩称跑一趙吧、ごくろうだが一走り行って下さい。(中日大辞典)という意味と用法をもつ言葉である。日本語で「たいへんなご迷惑をおかけした」は相手に重大な損害をかけた場合、例えば交通事故で、他人をひき殺した時の挨拶語として使えるだろうか。仮に百歩をゆずって、この「ご迷惑」が中国にあたえた損害(数千万といわれる人命、幾兆円になるか推定不能の財産)を蔽うに足る言葉だったにせよ、それはあくまでも、日本語的乃至は日本語文化の範囲内のことであり、中国においてそれが「麻煩」であることは絶対にできないし、絶対に許容されない。これは単に、この言葉の翻訳にあたった外務省の役人の語学力の程度の問題ではなく、その時

点における日本人の中国への認識、半世紀にわたる戦争についての認識の程度を、残念ながら示していると言わざるを得ないのである。

それから十年、「責任」を伴わない「反省」の結果は、みずからの行為の冷厳な評価を含む「侵略」をやや中立的な「進出」へと言いかえようとする動きを産んだ。十年一昔と云う。過去は水に流して、現在をよりよく、という思考形式、ミソギと呼ばれる習俗は、深々と日本人の生活様式に根をおろしている。それは日本においては一般的な淳風美俗とされるかもしれぬ。しかし、一步日本を出た時、ことに歴史を重んじ、事実を尊ぶ中国と対した時、絶対に通用するものではないことをわれわれは胆に銘じなければならぬのである。

「再見」と「さようなら」の間には、測り知れないほどの距離がある。われわれ語学教師は単に「再見」を「さようなら」におきかえることで満足してはならない。「再見」を通して「さようなら」を眺めること。それぞれの負っている文化的・歴史的背景のちがいをしっかりと把握することによって、自国の文化のありようを見なおすことが、外国語学習のアルファでありオメガである。と私は考えるのである。(一九八四年 一月四日)

(信大人文学部 教授)